森野昭

昆明―麗江間
列車で９時間

■麗江古城散策

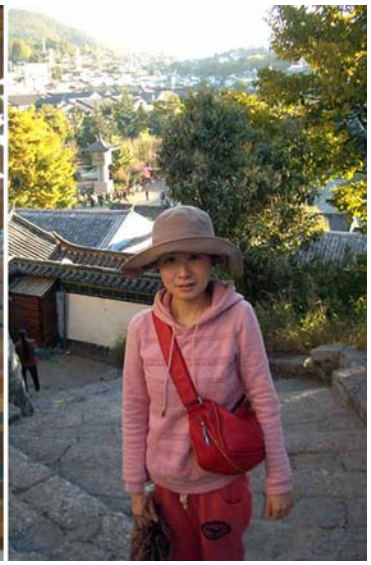
11 月 23 日（金）夜、昆明８時半発の寝台列車で麗江の旅にでました。翌朝６時半に麗江に着いたがまだ真っ暗闇だった。中国（北京）時間は、日本より１時間の時差にすぎないが、広大な領土の中国のこと、沿海地方より更に西側に位置している雲南省は日本より２時間は日の出が遅い。つまり、麗江の６時半は、日本の早暁４時半頃に相当するから、まだ暗いのです。

ホテルは麗江古城（旧市街）にあるらしい。麗江駅前にはたくさんの客引き業者がいて、車でホテルまで案内するという。麗江古城のホテルまで一人 10 元で案内するというので車に乗り、約１時間後に麗江古城の小高い丘にあるホテルに案内されました。ホテルといっても、客室十数室しかない民宿みたいなところですが、ツインルーム一泊 240 元（約 3000 円）という。「シングルベッドの部屋はあるのか？」と訊くと、「今日は詰まっている」とのことです。

中国のホテルは、ツインであろうとシングルであろうとあまり値段が違わない。上海など大都市のホテルでは一泊 500 元は下らないのだから、二部屋とっても合計 480 元なら満足です。しかも、部屋からは旧市街が一望できる眺めが気に入りました。同行してくれた肖茜さんがお目当てにしていたホテルが別にあったのですが、ここで二泊することにしました。その頃には８時になっており、外は朝の気配が漂っていた。

ホテル二階の部屋から旧市街の瓦屋根がつづく家並みが一望。その向こう側は新市街か？

ホテルから急な石段を下ると、10 分ほどで旧市街に着く。



ホテルの朝食は 10 時まで待たなければならなかったが、下界を見下ろすとマクドナルドの M の文字がかすかに見えたので、さっそくそこへ行って朝食を摂ることにしました。

本日は丸一日麗江古城（旧市街）の散策にあてました。

麗江古城散策　小路が迷路のように四通八達しており、石畳の道を歩いているうちに、どこにいるのか分からなくなった。沿道には、どこを歩いても土産物屋・銀細工屋・織物屋・CD 屋・カフェ・料理店が軒を連ねている。CD 屋からはラテン風音楽と共に、店員がドラムを叩く快い音が響いている（麗江の主要民族であるナシ族はドラムの工芸技術の伝統があるらしい）。下段右はチベット仏教（ラマ教）ゆかりの小塔であり、これを回すとお経を唱えるのと同じ御利益がある。雲南省の北西部はチベット自治区と接している。

途中で意外な物に遭遇しました（下の写真をご覧下さい）。わたしが立ち停まると、茜さんが気遣って「先生、気にしないでください。早く行きましょう」と先を促しました。私は笑いながら、面白半分でカメラのシャッターをパチリ。こんな店に日本人観光客は寄りつかないので売り上げに悪影響がでないのか、あるいは、中国人が喜んで入るので大繁盛？――それにしては、店内に誰も客はいませんでしたね。

反日感情が露わな垂れ幕　麗江の愛国的店主に拍手喝采！　ところで、旅行から帰った翌日、大学のいつもの自転車置き場へ行ったら、右のようにオートバイのナンバープレートに「日本人と犬 接近禁止」とあった。わが学校の学生の中にも嫌日家がいるらしい。かつて、上海のフランス租界地の公園に「シナ人と犬立ち入るべからず」と書いた標識があったそうだ。大国の自信を取り戻した現代中国の一部の人間が、白人から侮蔑を受けた恨みを意趣返しに日本人に向けているのだろうが、下品な物真似しかできない知性の乏しさはどうしようもない。わたしは笑いながらこれにも写真に収めたが、日本語科の学生にこんなヤツはいないはず。

ところで、今回の旅行でガイド役をしてくれた肖茜さん（雲南師範大の院生；本文中では朱茜の名前で登場）は、三年前まで私が教職に就いていた江西師範大学の教え子で、今回、昆明で職を得るきっかけをつくってくれました。反日感情が高揚しており、大学から「学外にでるときには、必ず中国人同伴のこと」と厳命をうけていたときにも、買い物で街へでるときには親切に同伴してくれました。今回の旅を家内に伝えると「茜さんと一緒なら安心。お礼に美味しい物を食べさせてあげてね」と賛成してくれたし、茜さんのご両親も「森野先生となら二人旅をしてもよろしい」と同意してくださったそうです。汽車の切符の手配などいろいろ準備してくれた茜さんの同伴で、何の心配もなく楽しい旅ができました。

散策で歩き疲れた頃に昼になり、屋外のレストランに入りました。麗江は旅行中、晴天にめぐまれ、11 月末にも関わらず暑からず寒からずで、正に『常春の国』でした。日差しは強烈で、野外レストランの中にも木漏れ日が差し込んでいました。

トンバ文字　ナシ族が使っている象形文字で、街中の店で見られるが、たぶん観光客に見せるためでしょう。

さて、昼間の観光を終えて、夕食は冬の定番である『火鍋料理』を食べようということになった。ライブ演奏を聴きながら食事しようと幾つかの店へ行ってみたが、どの店もロック調のがなり立てるような演奏で、スピーカーが大音響を響かせているので、頭がガンガンしてとても落ち着いて食事など出来そうにありません。結局、探し当てた火鍋専門店で食事をした。麗江古城広場では、若者が大きな輪をつくってダンスをしていました。

旅から帰ってインターネットで麗江古城の検索をしていたら、以下のような感想があり、私も同感です。

――夜には、爆音でディスコミュージックがかかる風俗街状態となります。ミラーボールが回る店内では、DJが叫んでいたり、アイドル風の歌手のライブをやっていたり、はてはトンパ文字実演ショーをやっていたりと、まさにカオス。中国の方に伺ったところ、今の中国の若者は、ここに出会いを求めているとのことで、ナンパ目的で中国全土から若者が集まるそうです。日本人が思い描く「少数民族が伝統的な暮らしをおくる静かな町並み」とはかけ離れている。

■ 玉龍雪山

麗江滞在二日目に、玉龍雪山に行きました。

山への駐車場まで業者が車で往復してくれます。途中、貸し防寒服と酸素ボンベを売っている店に案内されました。玉龍雪山（最高峰 5,596m）へ登るリフトは 3,000 メートル級と 4,500 メートル級の二種類あります。同宿人の若夫婦は 4,500 メートル級へ行くそうですが、私たちは事前調査で 3,000 メートル級を選びました。いずれも高地へ行くので、防寒服と酸素ボンベが必要とのことです。中国の女性は金のことになるとしっかり者です。茜さんと、同行した若夫婦の奥さんが一緒になって値切り交渉で頑張ってくれました（男どもはそれを見物）。結局、それぞれ 10 元づつ値切って、防寒服 40 元と酸素ボンベ 50 元となりました。ただし、後で町へ帰ったとき売店で酸素ボンベを 50 元で売っていました。中国では値切り交渉をしないと損をするのでしょう。

山岳地帯に入るところに検問所があり、入山料 105 元を払わなければなりません。茜さんは学生証を見せましたが大学院生はダメ、一方、満 69 歳の私の方はパスポートを示すと、数え年（70 歳）扱いの為か無料となりました。登山にかかる一人当たりの料金の明細は以下のとおりです。

観光税	80 元	
入山料	105 元	（ただし私は無料）
リフト料	57 元	
貸し防寒服代	40 元	
酸素ボンベ代	50 元	
送迎車代	50 元	
合計	382 元	（約 5,000 円）

（日中の物価差が５～１０倍なので、これはかなり高額と言えましょう）

駐車場から眺める玉龍雪山山系　→

山懐に抱かれた一本道を進むと、やがて登山口駐車場へ着きました。そこには、日曜日のためか観光バスが既に数十台も停まっておりました。

ここでリフト乗り場まで登山バスに乗り替えます。ところが、登山バスへの乗客が長蛇の列を作っており、このままでは私たちは１時間以上待たねばならないと思われます。なぜ、ホテルからの出発時間９時をもっと早くしてくれなかったのかと、私は不満でした。が、観光業者は仲間同士で通じ合っているらしく、私たちは、長蛇の列の一般客を尻目に、直ちに登山バスに乗る特典を得ました（これなら送迎車代 50 元は安い！）。

登山バスの車窓からグリーンのゴルフコースが見えました。日本のメール友でゴルフ狂の青柳さんという方によると、麗江には世界で二番目の高地を誇るゴルフコースがあるとのことです。「ここがそれかな？」とも思われますが、この地帯はせいぜい 2,500 メートル程度でしょう。ゴルフプレイヤーは一人も見えませんでしたが、こんな僻地まで金と時間をかけてやってくるゴフル愛好家とはどのような人なのでしょう。

こうして、登山口に着いた私たちは、リフトでスイスイと 3,000 メートルの地点に到達しました。

前夜買ったパンで軽い昼食後、木道がつづく路の散策が始まりました。

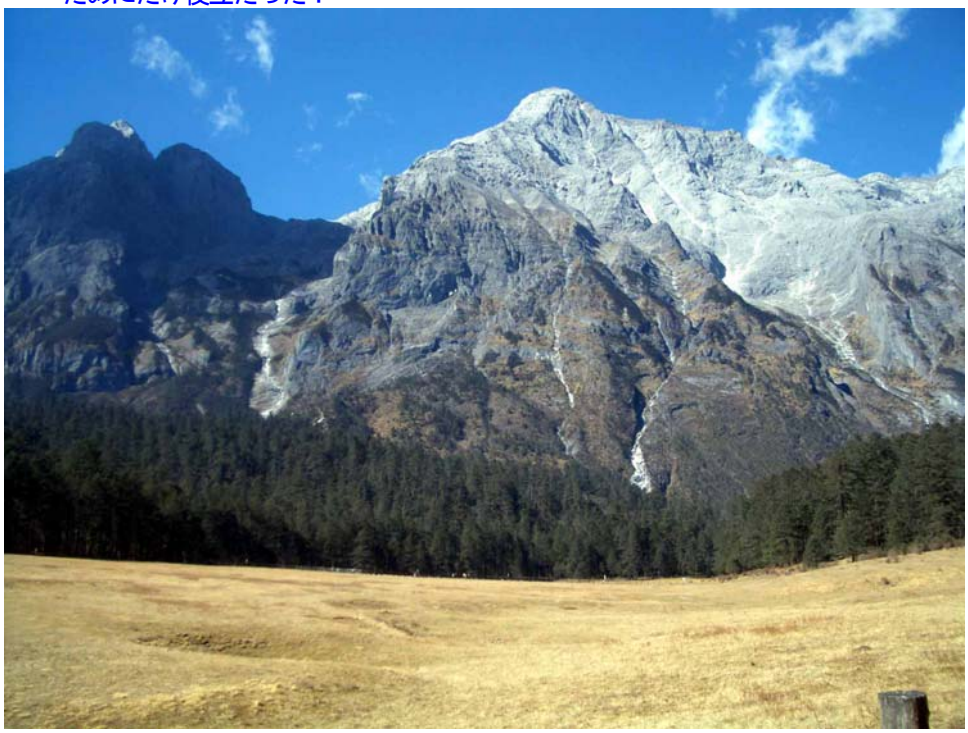
リフトが 3,000 メートルの高地に運ぶ

酸素ボンベと防寒服はこの記念写真を撮るためにだけ役立だった！

雄大な山を背景に

疎林の坂道を登り切ると陽光が降り注ぐ大空間が広がっております。3,000 メートルの高地とはいえ、少しも息苦しくありません（何のために酸素吸入ボンベを買ったのか？）。おまけに、ポカポカ陽気の中では、防寒服など無用です。

そういえば、昔 3,000 メートル級の北アルプスに登ったときにも、酸素ボンベなど必要なかったし、陽光の下では汗をかいたくらいで防寒具など無用でした。行き交う観光客は、酸素ボンベなど持っていないし、防寒服も着ていなかった。どうやら私たちは、業者に騙されたらしいです。



雪のように露出している石灰岩の山肌

草原は牛放牧のための牧草地らしく、所々に牛糞が散在していた。その向こうに屹立している山は、石灰岩の白い岩肌が露出している。おそらく月夜に遠方から眺めたら雪の山に見えるでしょう。この奇岩を眺めているうちに、ふとムソルグスキーの『禿げ山の一夜』が耳に響いてきました。

しかし、それにしてもここは『玉龍雪山』と呼ばれているのに雪が全くないのは不思議です。おそらく、この山の左側にそびえている山が玉龍雪山の主峰なのでしょう。私たちと同行した若夫婦は 4,500 メートル級のリフトに乗ったので、そちらが主峰への登山だったと思われます。

これも旅から帰ってからインターネットで調べた情報ですが、下の写真にあるように最高峰 5,596 メートルの山が紹介されていました。私たちもそちらへ行くべきでしたが、それは今後の楽しみに残しておくことにしましょう。

玉龍雪山の主峰と 4,506 メートル地点にある標識塔　ここなら酸素ボンベが必要かもしれないし、防寒服は必須だろう。右の写真はインターネットからダウンロードした写真に茜さんと私の写真を合成した架空写真。富士山より更に 700 メートルも高い地点にある標識塔の傍に立つのは憧れだ！　酸素ボンベと防寒服を無駄にしてしまったことへのせめてもの慰めとして、この合成写真を読者に披露しよう。

予定よりも早く下山し、３時頃にはホテルへ帰着しました。夕食は、茜さんの希望で回転寿司屋で摂りました。彼女は福建省の海辺の美しい街『厦門(アモイ)市』出身ですから、「魚介類はよく食べるが、回転寿司は未だ経験がない」そうです。帆立貝・マグロ・サーモンなど日本の回転寿司屋なら 15 皿 1,600 円で済むものが、ここでは、約倍の値段でした。ネタの鮮度は悪くないので、内陸の僻地である麗江でなら手頃な値段です。彼女はサーモンの刺身が大好物ですが、私が食べたことのない鱈のキモを砕いて味付けしたネタの寿司が「美味しい！」と言ったのには驚いた。本旅行でお世話になった彼女に腹いっぱい食べてもらいました。

（翌日<月>の朝、麗江を発ち夕方昆明に帰着）　（了）

回転寿司屋『禾緑』は上海にもあった。おそらく全国にチェーン店があるのでしょう。私の教え子は皆、寿司愛好家になった。日本の寿司文化が中国に広まるのはいいことだが、この調子で十三億の民が刺身と寿司を好んで食べるようになったら、世界の海から魚介類が消えてしまわないだろうかと、ちょっと心配になる。